

きーさん

若林 亨

『詐欺に注意』

『不審者に注意』

『大声 暴力 暴言 土下座要求など』

無理な要求はお控えください』

壁のポスターは真新しい。桜色のかわいいシールで四隅が留められている。他には毎日の食事の内容やエレベーターの一時停止の案内チラシがあり、きれいに色付けされたセロフアンの蝶も飾られてある。

数日前にはお花見があった。その時の集合写真は拡大され、花柄模様の枠の中に収まっている。参加者たちはみんな笑っている。しかしその中におやじはいない。

ワシの承諾なしに決めるなんて許さん。こんなもの誰が決めたんだ。まずわたしの意見を聞け。話はそれからだ。ワシは行かん。絶対に行かんぞ。

そう言い張って行かなかった。

玄関ロビーまで来たところで息子はおやじを立ち止まらせた。

「おやじ、どこ行くんだ」

そう聞いただけでは反応がないのは分かっている。一応聞いてみただけだ。すぐに言い直した。

「部長、どこへ行かれますか」

「おう」

おやじは振り返った。

そこそこ大きな会社で営業本部長まで勤めたおやじは再雇用の延長で七十五歳まで会社にかかわっていた。ところが完全に仕事から離れたとたん、むやみに歩き回るようになった。長年連れ添った女房が死んでからはさらに激しくなった。身の回りのことはほとんど自分で出来るのに歩くことだけが怪しい。突然外へ出て行方不明になる。

同居している息子が困った。今は失業中で日中も家にいるので近所の人や交番の警官に手伝ってもらって探して見つけることをくり返していたがさすがに面倒くさくなった。失業給付が切れたらまた働くことになる。そうならおやじを探せない。

幸い親父の年金が多かったので一年前からサービスタ付高齢者向け住宅に移っている。それでも外出は続き、そのたび職員を慌てさせたが、そのうち行動パターンが分かってきた。おやじは人の多いところへ向かうのだ。特にオフィス街が大好きで、通行量の多い交差点で信号待ちをしたり、昼休みの時間に定食屋の列に並んだりしていた。近くにオフィス街があつてよかつた。電車にでも乗られたら探すのに苦労する。

「おう」と返事して振り返ったおやじに息子は続けた。

「部長、今日は会議です」

「会議だったか」

「はい、会議です。会議ですから部屋へ戻りましょう」

無視されるのを承知で息子は言った。

案の定おやじは無視して玄関ドアの前に立ち、開けてくれとばかりに事務室の職員に目配せしている。

部屋でおやじがスーツに着替えるのは早かった。ネクタイを締めるのも手慣れたものだ。一八〇センチ六十五キロの細見で背筋の伸びたおやじにはスーツが似合う。以前から体型は変わらないので長く着続けている。このサ高住へ移る時にもスーツとネクタイはかなり持ってきた。シャツもネクタイも揃えていた。八十歳なりの浅黒い顔をしていたが、皺やシミは少なく、黒髪もたくさん残っていてずいぶん若く見える。まあまあ格好いい方だと息子は思っている。

「お気をつけて」

事務室の職員が笑顔で話しかけてきた。

「見失ったらまた一緒に探してください」

息子は開いたドアを恨めしく思いながら言った。

「それはもうお助けいたします。お父さんは賑やかなところが好きなのでしょうね。年齢にしては歩くのも早いですし。でも急に向きを変えられたりされますから注意してないと人混みに紛れてしまいますよね。くれぐれもお気をつけて」

のんきなことを言っただけだと息子は思ったが、これまで何度も迎えに来てもらっているのに頭を下げるしかない。

外へ出ようとするとう職員はわざわざ窓口から顔をのぞかせて、「デパートなんかもいいんじゃないありませんか」と付け加えてきた。

まったくおせっかいなやつだ。今日は目の前の公園を一周して終わらせようと思っっている。歩き続けているといつまでも部長のままなのだ。

デパートか……。

息子はちよつと考えた。たしかに人は多い。にぎやかで明るい。おやじは喜ぶ。万が一はぐれてもアナウンスしてくれる。

でも嫌な予感がする。

いつもより早めにさあ帰ろうと急かしたのがいけなかった。おやじは道の真ん中で足踏みを始めてしまった。これはいらついている時の態度だ。両手を大きく前後に振り、ふとももを高く上げてリズムを取っている。高校野球の入場行進でもあるまいに。そしてあたりを見回している。これは人を集めて欲しいというサインでもあった。部下に囲まれていた時の部長気分が抜けていない。

息子は一日を棒に振る覚悟でおやじに付き合うことにした。

やはりデパートは明るい。広くてきれいだし人も多い。

おやじは喜んでいた。さらに早足になり、六階の紳士服売り場へ向かって行った。おやじはその場所をよく知っている。

工場勤務しか経験のない息子は紳士服売り場といえば黒や紺のスーツが重苦しく並んでいるイメージだったが、そこには若者が着るようなカジュアルなジャケットやスーツが軽々しく吊るされていた。マネキンはどれも一段高く置かれていて高級なスーツを見事に着こなしている。床がやけに光って見えた。

突然おやじが「きーっ」とかん高い声を上げた。

「きーっ」がフロアーに響いて視線を集めた。

「おいおい」

息子は慌てておやじの肩をつかんだ。

「お世話になっております」

おやじは腰から上半身を折り曲げてていねいにお辞儀した。

「おいおい、何言ってるんだ」

「先生にはお世話になりっぱなしで」

おやじはマネキンの顔に向かって微笑みかけている。

「先日のコンペには参りました。さすがですな。マッサージの手配までしていただいてほんともう、恐れ入りやの鬼子母神、なんて、ななななな」

「やめろやめろ」

息子の声もかん高くなっていた。両腕をつかんだまま無理やり歩かせたものの、隣の紳士靴売り場で再び固まってしまった。今度は革靴に向かって「きみきみ」と呼びかける。

「だからやめろって」

「いや、このプロジェクトはそのまま続けてくれ。君に任せる。大丈夫大丈夫。責任はわたしが取るから」

おやじは革靴を見下ろして何度もうなずいている。

やはりサービス付高齢者向け住宅より認知症の人が入るグループホームの方がよかったかもしれないと息子は思う。サ高住はあくまで住宅だ。賃貸アパートのようなものだ。ひとりひとりの生活には干渉してこない。おやじがひとりで外出して食事の時間になっても帰って来ない時は連絡が来るのだが、あまりにひんばんに起こるので最近では外へ出ただけで「外出されました」とメールが来るようになった。そのつどびくびくさせられる。失業中だからいいものの働き出したらいちいち対応してもらえない。今でも十分ストレスがたまっている。

「きみきみ」

「はい部長、何ですか」

息子は靴の代わりに返事した。

「あー、きみきみ」

「はい」

「うーん、きみきみ」

「はい」

相手しているうちにばからしくなって息子は「行くぞ！」と先に歩き始めたがさすがに見捨てるわけにはいかず、結局そのあとにも紳士服売り場をぐるぐる回って帰ってきたのだ。た。

今からグループホームへ移るのはどうかと息子はケアマネージャーに相談してみたが、まだまだお父さんは自分で出来ることが多いからここでがんばりましょうと言われて息子は滅入った。

帰りが遅くなってもとりあえず帰ってこられますし、行方不明になってもいつもの交差点かデパートの紳士服売り場におられますし、交番にも伝えてあるので大丈夫でしょうと。紳士服売り場をおやじにインプットしたのは誰だ。事務室の職員だ。デパートなんかいいんじゃないですかってそのかしてきたのだ。

失業手当もあと四十日になった。次の認定日までにはまた就職活動を二回しなければならぬが、就職支援セミナーや職業訓練相談会に参加して活動実績にしている。まともな就職活動はしてない。働く気も起こらない。

ハローワークから帰ってきてソファでごろごろしていたら外から子供らの笑い声が聞こえてきた。

くそつと思った。鬼ごっこでもしているのだろうが、今日に限って癪に障る。叱られているようだ。

五十歳独身無職で何が悪い。

百六十センチ八十キロで何が悪い。

おやじがボケててなにが悪い。

腹いせに腹のたるみをつまんで引っ張ってみた。それでスイッチが入った。

気が付いたら上半身裸で腕立て伏せをしていた。五回も出来なかった。

くそつとさらにスイッチが入った。

再び気が付いたら家のガレージに立っていた。上半身は裸のままだ。

てのひらではだめだと思った。今のオレにはガッツが必要だ。そうだ握りこぶしでやるんだ。

息子は手のひらを握りこぶしに変えて胸の前へ突き出してみた。ぶよーんと二の腕の脂肪が垂れ下がる。力を入れてもぶよーんとしている。

ぶよーんは当然腹回りにもあった。横に広がっていてボリューム満点だ。

いよいよ息子にその時が来た。ガレージにひざまずき、握りこぶしを地面に当てて足を伸ばした。

体重が腕に乗る。

痛っと思わず膝をついてしまった。顔がゆがんだ。こぶしにはざらざらしたコンクリートの跡が付いている。痛いはずだ。

腕立て伏せの体勢を取っただけでこんなにも痛い。握りこぶしは神経のかたまりなのか。心構えが出来てなかっただけだと思ひ直して再びこぶしを作り、今度ははっはっと思を吹きかけてから再び地面に強く押し当てた。体は斜めに一直線。

体が重い。いや、それよりこぶしが痛い。我慢してゆっくり肘を曲げる。

重い、痛い、痛い、痛い。

「きーっ」

叫ぶと同時に腹ばいになってしまった。

この時息子は自分の「きーっ」が、紳士服売り場でおやじが発した「きーっ」と同じだと思った。音色も響きも余韻も同じで、まるでおやじが叫んでいるように感じたのだ。

子供らが寄って来た。

「おっちゃん大丈夫？」「何してんの」「あかんあかん、近寄ったらあかん」「なんで」「きーさんや」「きーさんってなに？」「変な人」「病気」「いやだ」「ママに言ってくる」

「帰ろう」「うん、帰ろう帰ろう」

一瞬火花が上がったようにやかましくなってすーと消えていった。

息子はゆっくり立ち上がった。たるんだ腹には少しばかりの砂。頭の中にはいま自分が叫んだ「きーっ」がこだましている。

でもなんだろう。すっとした気もしている。捕まえられない自分の影が向こうからやってきて脳天を貫いたような心地よいしびれだ。もう一度味わいたい。いや、ずっと味わっていたい。

この日から息子はガレージでの腕立て伏せを日課にした。もちろん上半身裸で握りこぶしの腕立て伏せ。しかしなかなか心地よいしびれはやってこなかった。「きーっ」と叫ぶことも出来なかった。無理やり叫ぼうとしても喉につかえて、ただ痛いだけで終わる。

それでも訓練の結果腕立て伏せは十回出来るようになった。

ゴールデンウィークのことだった。息子はおやじを車で最寄のターミナル駅まで連れて行くことにした。

そこはおやじが五十年以上使い続けたなじみの駅で、大規模な再開発の結果ロータリーや歩道橋が整備されて立体的な駅前生まれ変わった。高層マンションも建てられボリュームが増した。その推移を見てきているのでおやじはとても愛着を持っている。元駅長が市長選挙に立候補した時は必死になって応援していたし、百貨店誘致の話が出た時は推進会のメンバーとして署名活動もしていた。愛すべき駅なのだ。

でもおやじを連れて出た直接の要因は施設から外出を勧められたから。最近おやじに落ち着きがなく、やたらと施設内を歩き回るようになった。他の入居者の部屋を覗きこんだり、エレベーターに乗ったまま何度も上下したりする。顔が怖い、目が怖いと職員は言う。

つまりは迷惑しているということだ。帰り道が分からないと言って外出先から事務室へ電話してくることも多くなった。気前よく玄関のドアを開けてくれなくなると今度は足踏みしながらドアが開くの待って、人の出入りの隙にさっと外へ出てしまう。あまりにドアを開けないでいると虐待になってしまうらしい。事務室の中へ入ってくることもあり、職員を集めてくれと無茶を言う。「部長さんでしたね」とおだてるのは逆効果だった。ますます調子に乗ってパソコンをのぞき込んだり棚の書類を取り出そうとすることもある。「セクハラに比べたらかわいらしいものですよ」と言っているがその顔は笑いながら引きつっていた。

おやじは助手席でおとなしくしていた。じつと前を向いている。歩こうと思えば歩ける距離だったが、すれ違う人にいちいち手を上げて挨拶したりするので、そのたび断りを入れなければならなくて面倒くさい。ストレスがたまる。

駅のパーキングに車を止めてもおやじはなかなか降りてこなかった。スーツに着替えて張り切って出てきたのに助手席で固まっている。

息子がドアを開けると、待ってましたとばかりに出てきてネクタイの結び目を絞り直した。そういうことか、オレは部下なんだ。

JRと私鉄を結ぶ連絡橋は通勤時間帯になると肩がぶつかると込み合う場所で、わざわざその時間に合わせてやって来たのだが、今日がゴールデンウィーク真っ只中ということとを失念していた。失業中の息子は曜日感覚が鈍っていた。

「これから会議だ。みんなを集めてくれ」

おやじが命令した。

息子はとっさに反応できなかった。なのでおやじにスイッチが入ってしまった。

「きみ、会議に遅れるじゃないか。早くしろ」

息子は無視しておやじの背中を押した。

「今日はきみがプレゼンする日だろう。わざわざ支店長会議の冒頭に時間を取ってやったんだ。早くしろ」

背中を押したまま改札を通った。車へ引き返すという選択肢はなかった。そうするとますますスイッチが入っておやじの演説が長引くのが分かっていた。

おやじは五番ホームの九番丸印に立ち、後ろ手に組んだまま来る電車来る電車に乗り込もうとした。ここがおやじの定位置だったのか。息子はそう思いながらそのつどおやじをホームへ引き戻した。

向かいのホームに特急が入ってきた時は焦った。

「出張だったな」

そう言って一直線に特急へ乗ろうとする。まっすぐ歩けばホームから落ちることが分かっているのだ。

おやじの体に抱きついてホームの真ん中に連れ戻し、「いい加減にしろ」と怒鳴ったとたんおやじの体が硬直した。

「くーっ」

首を伸ばしておやじが叫ぶ。甲高い声がホームの屋根に当たって割れる。

「くーっ」

それが「苦しい！」と聞こえた。

「くそつたれ！」とも聞こえる。

おやじに抱きついたまま息子の体も徐々に固まっていった。

そしてにわかには背筋を伸ばして叫んだ。

「くーっ」

失業手当が切れてしまった。そろそろ真剣に仕事を探さなければならない。実家暮らしなので家賃はいらぬが光熱費はかかる。旅行には行かないが車も維持費がかかる。グルメではないがコンビニの弁当も値上がりしている。なにより貯金がない。おやじの年金を頼りにするのも情けない。やはり働かなければならない。

息子は腕立て伏せにはまっていた。一日三度、朝昼夜で三十回。もう握りこぶしの関節のでっぱりが削れて丸くなっている。痛みにも慣れてきた。子供らの視線も気にならなくなった。「きーさん」とからかわれれば逆に張り切って腕立て伏せを始める。そしてわざと「きーっ」と声を上げて子供らを喜ばせる。人気者になった気分だ。

「きーさんとしやべったらだめだつてママが言つてた」「どうしてなの」「病気だから」「どんな病気？」「変な病気」「かわいそう」「うん、かわいそう」「かわいそう」「かわいそう」そんな声も自分になつているのだと思ひ込んでいる。

梅雨入りが発表された日に施設から電話がかかってきた。

「お父さんの微熱が長引いているので内科の先生に来てもらつたらすぐに総合病院へ行くようにとのことなので、よろしく願ひします。これ以上こちらでは対応できません」

あとはご家族の責任ですよと言わんばかりのつるつとした声の主は外出を勧めてきたあの職員だ。電話の向こうでほくそ笑んでいるに違ひない。

検査の結果おやじは肺炎になつていた。酸素濃度が低く、膿もたまっているとのことではばらく入院することになった。

息子は最初の二日間だけ顔を見せたが、おやじは管をたくさん付けられベッドでぐったりしているだけなので何もすることがない。モニターに映る心拍数や脈拍の折れ線グラフも気持ち悪かつた。臨終の瞬間を待っているようだ。おやじのための車椅子は座り心地が悪く、椅子を頼んでもなかなか持つてきてくれない。

まあ病院にいてくれたら安心だと思つて一週間後に再び行つてみたらおやじはすっかり元気になつていた。肺にたまつていた膿は取れて、酸素濃度や血圧も正常に戻っている。点滴も生理食塩水になつていた。

しかし元気になったせいでも手のかかる患者になってしまった。また部長に戻ってしまったのだ。作業療法士にはリハビリのたびに人を集めてくれと言うし、ナースセンターからは書類を持ち出そうとする。

「お年ですからね」

看護師たちはやさしく言ってくれるが、適当に拘束してくれと頼んでおけばよかった。でももう遅い。明日退院なのだ。

「お父さんはにぎやかな所がお好きなようですね」

担当の若い看護師が言う。どこかで聞いたセリフだ。

壁に貼られたポスターは真新しい。

『ストップ暴力』

『他の患者様に迷惑をかけないでください』

『診察の妨げになる行為は控えてください』

退院後は何事もなかったかのように元の生活に戻った。

おやじは杖を持つようになったが体を支えるわけではなく、指さし代わりに使っている。こんなところに車を停めたら邪魔だ、庭の手入れがなつとらん、このあたりも再開発しろなどと言って振り回すので危なくて仕方がない。散歩中の犬にも突き出したりするので何度も謝らなければならない。

ただ、にぎやかな場所へ行こうとはしなくなった。それは意外だった。外出しても施設の周辺だけで満足しているし、背広にも着替えない。歩くのも遅くなった。「部長」という呼びかけにも応じない。これが一番の変化だった。一気に老けたようだ。

「最近おとうさんは落ち着いてらっしゃいますね」

事務室の職員は笑顔で言う。歯を見せて笑っている。わたしたちも楽になりましたと喜んでいいるのだ。

息子はハローワークの指導員が勧めるまま何社か面接を受けたがすべて断られていた。理由は分からない。普通免許以外に資格はなかったし、営業経験もない。口下手、人見知り、知り合いも少ないからコネもない。指導員からはスキルアップのために職業訓練校も紹介されたがその気になれない。すべてがめんどうくさいのだ。そう腕立て伏せ以外は。

自分の握りこぶしを見ることだけが励みだった。骨のでっぱりはほとんどなくなって平たくなっていく。よしよし、努力のたまものだ。最近痛みも感じなくなっていた。神経も削られているのだ。ちよっと頼りない気はするが。

そして胸にも手を当てた。筋肉の盛り上がりも期待したがこっちは全くだめだった。まだまだ脂肪に覆われている。力こぶも盛り上がらなかった。やはり脂肪に覆われている。

おやじの外出に付き合うことも減ってなんとなく手持ち無沙汰に感じていたところへ施設から電話がかかってきた。

「お父さんの様子がおかしいので来てください」

いつもの職員だ。怒っているような口調で言い放つ。

「何かやらかしましたか」

息子は慌てて尋ねた。

「来ていただければ分かります」

「また熱でも出ましたか」

「熱はありません」

「こけたんですか」

「こけてません」

「セクハラですか」

「違います」

「じゃあいったい何なのですか」

「まあその……」

「はっきり言ってもらえませんか」

「……なんといいですか」

「暴れたんですね」

「いえ、暴れるというか、がんばっているというか」

どうも歯切れが悪い。他の入居者に迷惑をかけているようではなさそうなのでひとまず安心して息子は施設へ向かった。

車を運転しながらあれっと思った。ブレーキの利きが悪い。余裕をもって踏んでいるはずなのに停止線ぎりぎりまで止まる。信号が青になったことに気付かない。後方からのクラクションで知らされる。中央線に寄りすぎている。戻ってもまた寄ってしまう。バイクが見えない。見えたと思ったら割り込みされている。指示器を出し忘れる。人が通る。

すべてが少しずつ遅れているようだ。

そういえば最近頭の中をしつこく行き来するやつらがいる。

自分が買うものだけが値上げされている。持ち物はすべて暗号資産に変えられている。誘拐容疑がかけられている。おやじの背はぐんぐん伸びていく。

確かめようとすればするほどまとわりついてくる意味不明な代物。

あっ、またやってきた。

あっ、施設の前を通り過ぎてしまった。

来いと言われてすぐに来たのだから当然歓迎されるものと思っていたが、事務室の職員は息子の顔を見たあとすぐに目をそらし、バツ悪そうに頭を下げた。

「おやじは部屋ですか」と聞くと、パソコンに目を向けたまま「はい」と返事する。

「何があったんですか」

「お部屋におられますのでどうぞ」

「だから、何があったんだって聞いてるんだよ」

息子が声を荒げたところで施設長がやってきた。重量級のウエイトリフティングの選手だったと聞いている。首も腕もふとももも見事に筋肉太りしている。大きな体を不器用に

ねらせて、どうもどうもと低姿勢をアピールしているが威圧感はない。この体で体当たりされたらひとたまりもないだろう。

「なあに、たいしたことありませんよ。職員が大げさに思っているだけです」

施設長は落ち着き払って言う。

施設長のうしろに付いて歩くと前が良く見えない。背中が広すぎる。ローカも狭く感じる。

エレベーターも窮屈だ。

スリッパの音をさせて二〇五号室の前に来た。

ノックしようとしたら中から何か聞こえた。

「……っ」

何の音か。

「——っ」

ん？ ため息か。

「うっ」

や、やばいぞ。便をきばってるのか。

「うーう」

息子は慌ててドアを開けた。

と同時に、「きーっ」という叫び声が響いた。

部屋の中には風が吹いていた。カーテンが大きく膨らんでいる。

「がんばってますね」

施設長がおだやかに話しかけた。

おやじは床に腹ばいになっている。

息子が近づくより先におやじは体を起こし、膝をついた状態から腕立て伏せの体勢へ移っていった。

息子は見た。おやじが握りこぶしを作っているのを。その握りこぶしを床に当てているのを。

「止める止める」

息子はおやじの体を抱きかかえてベッドに座らせた。

「ばかなことをするな。骨が折れてしまうぞ」

「オレはおまえのおやじだ。おまえの真似をしただけだ」

そう言っておやじは握りこぶしを息子の前に突き出した。

それは指の骨にしわくちゃの薄皮を貼りつけただけの痛々しいこぶしだった。血の気のない青い血管が幾筋も浮き立ち、息を吹きかけただけでポキポキ折れそうなほどもろく思えた。

息子はこぶしから目をそらした。

「がんばりましたね。お疲れさまでした」

施設長がおやじにやさしく話しかける。

「今日はどういいかい」

「ええ十分ですよ。休んでください」

「あしたもやるぞ」

おやじは施設長に向かって両こぶしを突き出した。

「どうぞどうぞ。息子さんも来られたことですからこれからは息子さんと一緒に」

と施設長は息子に目をやり、

「上半身裸で」と付け加えた。

もう風は吹かなかった。息子は窓を閉め、おやじが握りこぶしを当てたあたりの床を眺めた。そこは骨の形にへこんでいて、腹ばいになったあたりはまるで自分が腹ばいになったかのように丸く汗の跡が付いていた。

この家で再びおやじと一緒に暮らすようになって一ヶ月。あの施設長のセリフがこたえた。

「おとうさんは息子さんが好きなんです。常に一緒にいてあげてください。その方が幸せですから」

要するに早く出て行ってくれということだ。フラフープでもするかのように腰をくねらせ、筋肉隆々の上半身で訴えてきた。

「おやじ、今日もがんばるのか」

息子はベッドに横たわっているおやじに声をかけた。

「おう」とおやじは返した。

「自分で起き上がれるか」

「おう」

「無理だろう」

「おう」

これが始まりの挨拶だった。息子は急に痩せ始めたおやじの体に両腕を回し、抱きかかえるようにして上体を起こした。

部屋にはおやじが好んで着ていた上下のスーツが等身大に吊るされている。胸ポケットからは勤続五十一年の祝いにももらった白いハンカチがのぞいている。床には革靴も置かれてある。このままサンプルとしてデパートの紳士服売り場へ持っていけそうだ。

「よし、今日もがんばろう」

「おう」

「自分で立てるか」

「おう」

「無理だろう」

「おう」

息子は座っているおやじの両脇に手を入れて立ちあがらせ、そのまま車椅子に乗せた。毎日やっているから慣れたものだった。

車椅子に座らせた後はじゃんけんをする。指の運動とモチベーションアップのためだ。始めのうちはおやじも勝ち負けにこだわっていたがそのうちめんどくさそうになり、最近ではもうグーしか出さなくなった。それでいい。十分やる気を示している。

車椅子を外へ出すのがひと苦労だったがそれにも慣れてきた。後ろから引きながら玄関までの段差を下り、その勢いでガレージまで引っ張っていく。

外では秋風の吹く中、子供らが元気に走り回っている。こちらを気にする様子はない。こちらにも気にしない。どの子もずいぶん大きくなった気がする。あの子は知らない子だ。この前引っ越してきたのだろうか。回覧板が回ってきたはずだが詳しく見てないので分からない。

近所付き合ひも疎くなった。自治会の役をしていた頃は町内や学区の催しに参加していたのでおおよそ住人の顔は覚えていたが、最近転出と転入が繰り返されてがらっと顔ぶれが変わってしまったので誰が誰か分からない。それでも子供らは元気に走り回っている。そこだけは変わらない。

「ちよつと寒いな」

息子は自分につぶやいたつもりだったがおやじが「おう」と返してきた。

「今日は寒いからやめようか」

「……」

「やっぱりやろうか」

「おう」

息子は上着を全部脱いで上半身裸になった。四ヶ月続けている腕立て伏せのおかげで胸は少し引き締まってきたが、腹回りは相変わらずぶよぶよしている。でもそんなことはもうどうでもいい。おやじが死んだら年金がなくなり、たちまち生活に困ることになるだろうがそれもどうでもいい。働く気は失せている。どうでもいいことだらけだ。

車椅子のおやじは息子の裸を見ながらゆっくり握りこぶしを作り、胸の前へ突き出した。それがおやじの精一杯の腕立て伏せだった。それを見て息子も握りこぶしを作った。

「やるぞ」

息子はいつも通りこぶしを地面に当て、体を一直線に伸ばしてゆっくりとひじを曲げた。痛みは感じなかった。二回三回と繰り返してもこぶしに痛みはやってこない。自分の体重も感じない。

今日に限ってどうしたんだと思ったその時、背中が急に重くなった。とっさに腕に力を入れて押しつぶされるのを防いだ。こぶしが激しく痛む。

「きーっ」

重さに耐えながら叫んだ。

これだ、これなんだ。心地よいしびれが脳天を貫く。

「きーっ」

おやじも同時に叫んでいた。息子の背中最後まで力を振り絞って叫んでいた。自力で車椅子から立ち上がり、息子の背中めがけて倒れ込んだのだ。

息子は満足していた。自分にはもうこれしか残されてないのだと思う。

だからおやじを背中に乗せたまま、握りこぶしの腕立て伏せを続けているのだ。